

# 潟語かたがた

(十八)

文・小西 一三  
絵・小西 由紀子

## 潟の漁と出稼ぎ その①

現在の神明町は、かつて水田だった一帯を埋めたててきた町。鎌田健蔵さん(七三)、エイ子さん夫婦は昭和二十八年に結婚し、その頃からこの地区に住み、さまざまな仕事をしてきました。健蔵さんは今でも海に出る現役の漁師さん。潟と海の漁についてうかがいました。

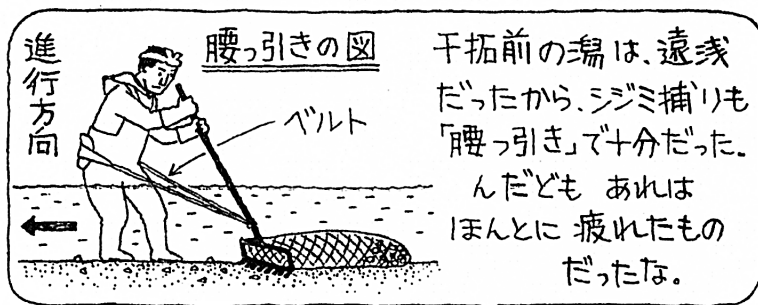
### シジミ獲りは「腰っ引き」だった

親父も潟の漁師だったが、俺も十六歳の頃から潟の漁に出るようになった。当時の漁師は食うだけで精いっぱい。んだもんだが、俺も北海道に出稼ぎに行くようになった。天王出身の兒玉さんという方がやっていた釧路の「石炭こいうん」という職場だった。六、七年も行ってたべな。出稼ぎを止めてからまた潟で漁師をやった。

干拓前の潟は、かなり遠浅でな。今の防潮水門の辺りなど、胴長のままでかなり沖まで行けどもんだ。だがシジミ獲りなど船は使わねで人間が直接、引っぱったもんだ。「腰っ引き」って言ったな。腰にベルトを回わして、棒を動かしながら後ろ向きに進む。ベルトが腰に食い込むもんだが、腰には綿入れを巻いでな。冬の吹雪の日でも潟の中に入って引っぱった。午前中いっぱい引っぱって、午後からは「通し」を使って選別だ。いぐやったもんだ

な……。 (健蔵さん)

結婚した頃、父さんは釧路に出稼ぎに行つてで、帰つてくるのは盆と正月だけ。私は父さんの本家の仕事を手伝つてたもんです。出稼ぎを止めて潟で漁をするようになってからは、シジミの選別もするようになった。今、四十二歳になる息子が二歳だった頃、その息子をおぶって選別したもんです。息子は私が動くもんだが「やめれ、やめれ」って背中であぐさし続けるし、あの時は私も本当にやめでぐなつたすな。そのうち干拓が始まり、父さんは干拓の現場で仕事をするようになった。(エイ子さん)



干拓前の潟は、遠浅だったから、シジミ捕りも「腰っ引き」で十分だった。んだども あれはほんとに疲れたものだったな。



午前中一杯引っぱって午後には選別だったナ...